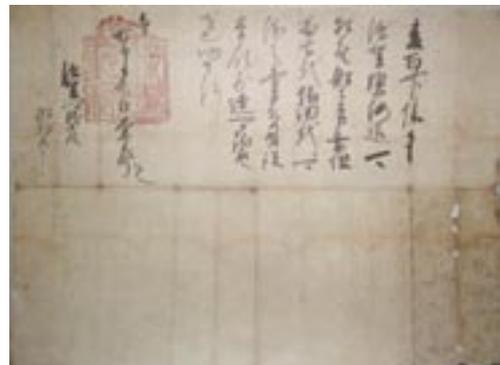


4 相模川のめぐみ



● 相模川の水運

相模川の水運の史料は戦国時代よりみられません。近世には甲斐・津久井の材木や流域村々からの年貢などを河口の須賀・柳島の湊へ送り、海船に積み替え江戸へ送る輸送路が確立しました。寛文4年(1664)には、津久井県太井村に荒川番所が設置され、流通物資に運上金が賦課されました。物資の輸送を担った高瀬船には時として大山参詣の人々も運ばれ、相模川は人と物資の行き交う動脈として発展し、須賀湊は川と海の結節点として繁栄しました。



元龜元年(1570) 北条氏印判状

● 高瀬船

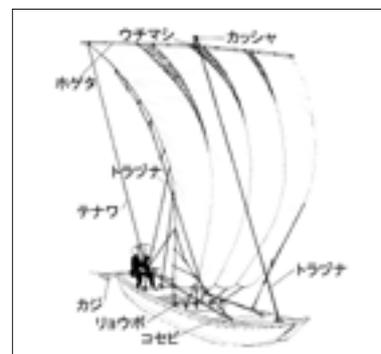
交通機関が整備される昭和初期までは、現在の山梨県上野原市付近と河口の平塚市須賀などの間を高瀬船が行き来していました。上流からは炭や薪、米などを積んで下ってきて、河口の須賀からは肥料や塩、日用雑貨などを積んで上りました。

高瀬船は、アユ漁などに用いるサンパ船と構造は同じですが、サンパの全長が7~8mだったのに比べ12m前後ある大型の船でした。底板は幅の狭い板をつなぎ合わせて造り、川底の石に当たっても割れにくい構造になっていました。帆は5枚などに分かれ、その隙間が編み目になって扇形に広がるのが特徴で、川船としてはたいへん大きな帆でした。

春から夏は、帆を張って南風を受けて上流に上り、秋から冬は背張り棒を船首の穴に通して川岸から押し、引き綱で川の中を引いて上りました。南風のある季節には、須賀から城山町小倉まで半日ほどで上ることができたとされています。しかし、北風の季節には人が引いて上ったので、小倉まで3、4日かかりました。流域には所々に船宿があり、ここに泊まりながら上りました。



高瀬船の模型



高瀬船の部分名称

●投網

相模川の漁はアユ漁が中心で、戦後しばらくはアユをとって売ることを専業や副業にする人もいました。下流域のアユ漁は、投網とコロガシ（カケド）が昔から盛んで、現在も行われています。投網は、オカブチやカチブチといって川を歩いて打つ方法と、フナブチといってサンパ船に乗って打つ方法とがあり、フナブチは川の深い所で行いました。また、網の広げ方には、円、楕円、四角などがあり、川の状況やとる魚によって広げ方を工夫しました。

投網は流域のほぼ全域で行われていますが、下流域は投網が編み目の大きさによって細かく分化しているという特徴があります。目の大きな順に、大目、中目、アキメ、小目、小豆目があり、とる魚に応じて網を使い分けました。最も大きな大目は編み目が一寸でコイやボラをとり、アキメは七分目ぐらいでニサイ、ウグイ、フナをとり、中目は約五分目でイナやコノシロをとる網でした。小目はセブチともいい、三分五厘から四分目でアユをとるための網です。アユの他にウナギやハゼやエビも取りました。最も目の細かい小豆目は三分目で、解禁前のアユをとりました。

現在の投網は化学繊維でできていますが、かつては絹糸を材料として自分ですきました。アンバリとケタを使って一目ずつすいていき、錘も砥石製のヤガタに鉛を流し込んでイヤ（ヤ）を自作しました。小目の場合、編目はぜんぶで27～28万目になり、一日に一万目すくのがやっとだったといいます。さらに水張り、イヤの取り付け、柿渋くれ、袋作りの工程を加えると、投網一帖の製作に40日くらい要したことになります。



投網



フナブチ

●コロガシ

下流域を代表するアユ釣りで、カケドともいいます。仕掛けは、道糸にタマヤと呼ぶ球形の錘を結わえ、先端に両掛のハリを5～6本つけます。仕掛けを対岸方向へ投げ、竿を上流から下流へ扇形に操作し、アユをハリに引っ掛けてとります。



●ウナギモジリ

モジリには、ウナギモジリ、エビモジリ、カニモジリなどがあります。モジリは内部にコシタと呼ぶカエシがついていて、入った魚が逃げ出せない仕組みになっています。ウナギモジリはコシタが二重になっているのが特徴で、奥のコシタの内側にミミズやタニシを餌として詰めました。夕方、モジリの口を川下に向けてかけ、上ってくるウナギをとりました。ウナギはアユに次いで売買の対象になった魚で、ハキナワ、カイヅリ、ウナギカキなど多種の漁法がありました。



ウナギモジリ